

裁縫教育とハンドメイド活動の関係：
インタビューを中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 泉 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4340

裁縫教育とハンドメイド活動の関係 —インタビューを中心に—

学芸学部 化粧ファッション学科 非常勤講師 山本 泉

要旨

ものにあふれた昨今の日本においてもハンドメイドの人気は衰えず、多くの人々が余暇の充実に加えて、自己表現の手段としてもハンドメイド活動を行っている。その活動を、仕事であるか趣味であるかに関わらず「生涯活動」と位置づける時、その内容の充実度や選択肢の広がりには重要な要素となる。また現在、文部科学省から公示されている学習指導要領の方針の中に明記されている「生きる力」とは心豊かに生きる能力を意味すると考えた時、「生きがい」とも言い換えられる「生涯活動」の重要性を無視することはできない。現在、多くの人々にとっての「生涯活動」となり得ているハンドメイド活動において、学校での家庭科教育、特に裁縫教育が及ぼす影響について仮説を立て検証しようと考え、前報¹⁾ではこの研究の背景とハンドメイド活動の現状、今後の研究計画をについて述べた。本報ではインタビュー調査を中心に研究の経過を述べる。

キーワード：ハンドメイド、手芸、家庭科、裁縫、生涯活動

1. はじめに

昨今の日本はものにあふれ、さまざまなレベルの品質のものがそれぞれに妥当な価格で入手できる。そのような中でもハンドメイドの人気は衰えず、多くの人々が手芸などのハンドメイド活動を行い、余暇の充実を図るだけでなく、自身の生活を彩り、ブログでの発表やハンドメイド通販サイトでの販売を通して社会に向けて発信している。それは、仕事であるか趣味であるかということに関係無く、一種のライフワークとも生涯学習とも捉えることができる。このような活動を「生涯活動」と位置づける時、その内容の充実度や選択肢の広がりには、その人の人生において重要な要素となる。

他方、文部科学省から現在公示されている学習指導要領には「生徒に生きる力をはぐくむことを目指す」という方針が明記されている。この「生きる力」とは、単に収入を得る能力や家事などの生活能力だけで成立するものではなく、心豊かに生きる能力を意味すると考えると、「生きがい」とも言い換えられる「生涯活動」の重要性を無視することはできず、その選択肢を得る機会ほどの生徒にも平等に広く与えられるべきとも言える。

現代の日本であえてハンドメイド活動を行う人々の動向を見てみると、その制作物には年代ごとにある種の傾向があるように見受けられた。それは、製作に縫

製作業を含むかどうか、という点である。一方、家庭科教育における裁縫教育の内容は学習指導要領の改訂ごとに内容が少なく簡単なものになってきており、現在は中学や高校の家庭科の授業で衣服を作ることは少なくなっているようである。このことは「服が工場の機械でポンとできる」という発想をする大学生がいる²⁾ことからもうかがえる。「衣服は人の手で作られるもの」という発想がそもそも無ければ、自分で衣服を作る、という行為はハードルが高くなり、ハンドメイド活動の選択肢を狭めていることになる。

これらのことから、ハンドメイド活動と学校家庭科教育の変遷との関連を探ることにより、より充実した生涯活動としてのハンドメイド活動を視野に入れた裁縫教育のあり方について考察することを目的とし、本報では現在ハンドメイド活動を行っている人々へのインタビュー調査について述べる。

2. インタビュー概要と目的

本研究では現在、なんらかのハンドメイド活動を趣味のレベルを越えた範囲で行っている人を中心にインタビューを実施している。本報で報告するインタビューは、2017年11月から2018年9月にかけて実施したもので、対象者は家庭科教員とハンドメイドイベント・キルト展の出展者である。質問項目は、生年月・過去に受けた裁縫教育・幼少期からの衣服の入手方

法・自身のハンドメイド活動について・ものづくり全般に対する意識、を基本とし、話が雑談に逸れた場合もあえて軌道修正はせず、話題の流れに任せて聞き取りを行った。また、「服が工場の機械でポンとできる」という発想²⁾についてどう感じるかについても質問した。インタビュー後に確認すべき事項ができた時には、再度聞き取りを行える環境にあった。この調査は、今後のインタビューやアンケートの方向性の検討、ハンドメイド活動と裁縫教育との関連性についての知見の獲得、各年代の学習指導要領とのすり合わせを試みることを目的としている。

なお、インタビュー対象者にはインタビュー調査の目的とその内容の使用範囲についての説明を行い、掲載の同意を得た。

3. インタビュー対象と内容

本報では以下3名からのインタビュー内容について述べる。

インタビュー対象者①

年齢：60代 キルト教室・ショップ主催者

(小学校：鹿児島県、中学校、高校：兵庫県)

[過去に受けた裁縫教育について]

小学時代は雑巾みたいなものを手縫いで作った。ハンカチに刺しゅうもした。中学時代は何か衣服を縫った覚えがない。同世代の違う学校の人は浴衣を縫った人もいたと記憶している。高校時代はパジャマ、衿無しジャケット、スカートを作った。その後は裁縫教育を専門的に受けたことは無かった。

[幼少期からの衣服の入手方法]

小学生までは郊外に住んでいたためか、既製品を購入できる店がそれほど無く、日常着も母の手作りだった。ミシンではなく手縫いだったような記憶がある。また祖母やおばも服や編み物などを作ってくれていた。町の雑貨店のようなところに服は置いていたが、種類が少なかった。中学生からは都市部に住み、既製服を買って着る時代になっていた。服に関する思い出として、百貨店で買ってもらったワンピースを気に入って着ていたが、ある日全く同じ服を着た少女に出会い、いい気持ちじゃなかった、というものがある。その時、既製服を着るということはそういうことなんだ、と思った。現在でも、洋服の選び方にその影響があるように思う。

[自身のハンドメイド活動について]

自分の子供の服は、全部ではないが幼少期はよく

作っていた。子供が幼い頃にサークルでパッチワークキルトを始めたが、縁が有って布を扱う店舗を営業することになり、購入者に講習などもするようになった。布地メーカーなどとの取引も増え、人に教えるとなると自分も技術向上しないといけないと思い、権威のある協会の講座で学び資格を取った。現在は教室等の運営だけではなく、キルト展などで広く作品発表をしている。

[ものづくり全般に対する意識]

贅沢なものでもなく、自宅で音楽を聴いておいしいお茶を淹れて、という心豊かな生活をしたい。そのために自分で手間をかけることが楽しい。バッグや服など、世間で今どんなものが流行っているのか見るのが好きで、作ってみたいとも思うこともある。食事などについては、以前は自分が作らないと食べられないから作っていた。今は作らなくても買える世の中になったが、年齢がいったせいか、自然のまま、素材のままのものがおいしいと思うので、結局自分で作る。「服が工場の機械でポンとできる」という発想には驚いた。

インタビュー対象者②

年齢：50代、高校家庭科教員

(小・中・高校：兵庫県)

[過去に受けた裁縫教育について]

小学時代は巾着を手縫いで、枕カバーをミシンで縫製した。中学時代は衿付き袖なしブラウス、パジャマ、フレアスカートを縫製。パジャマはデザインにこだわってフリルなどを独自に付けた。1年上の先輩はワンピースを縫っていたと記憶している。高校時代は裏地付きスカートを製作、ベルト芯、ファスナーを付けた。大学は教育学部・中学校家庭科の食物専攻だった。授業でブラウス、スカート、浴衣を製作したが、中学・高校の頃から内容はそれほどレベルアップしたわけではなく、大学で縫製を専門的に学んだという認識は本人には無い。

[幼少期からの衣服の入手方法]

小学時代までの衣服は既製品も購入していたが、ワンピースなど母の手作りも多かった(その方が経済的に良いものができるので)。自分の頃は既製品も手頃な価格になっていたが、兄が子供の頃はまだ既製品は高額であったようだ。同級生の入学式のワンピースなどはそれぞれの母のお手製が多かった。中学時代はいわゆる「良い服」は母が縫っていた。母は女学校で裁縫については一通り習っていたようで

ある。

[自身のハンドメイド活動について]

家庭科教員として縫製を教えているが、被服分野の授業時間数はかなり減ってきている。自分の子供の服は、経済的に良いものができるので幼児ぐらいまでは自分で作っていた。余り布で何が作れるか考えるのも面白かった。

[ものづくり全般に対する意識]

昨今では、衣服はもちろん、料理も缶詰やレトルトなど既製品が多く出回っているが、だいたいのは自分で作れるのではないかと思う。たとえばホワイトソースなど自分で作った方が安くておいしい。

「服が工場の機械でポンとできる」という発想は理解できない。縫い代の意味を知らない家庭科教員がいて驚いたことがあるが、根底は同じなのかもしれない。

インタビュー対象者③

年齢：30代 アクセサリー制作販売 [副業]

(小・中・高校：兵庫県)

[過去に受けた裁縫教育について]

小学生の時に巾着、ナップサック(制作キット)、中学生の時にエプロンを縫ったかも(記憶曖昧)、手芸クラブでマスコットを作った。高校でエプロンに刺しゅうをした。

[幼少期からの衣服の入手方法]

日常着は既製品を購入していたが、幼い頃は「こんなドレスが着たい。」という母が作ってくれていた。(その方が経済的だから。)母は洋裁を専門的に学んだことは無いと思うが洋裁は好きで、型紙なども自分で作っていたようだ。

[自身のハンドメイド活動について]

もともと絵を描くことが好きで、漫画家になりたいという子供らしい夢を持っていた。成長してからは趣味でイラストなどを描いていたが、イラストだけでは自分より上手い人がいくらでもいると感じており、フェルトなどの布地と刺しゅうで表現することを思いついた。自分のイラストを基に布で雑貨を製作し、委託販売やwebショップで販売するようになったが、ここ数年は忙しく製作販売をやめていた。日本の伝統的な材料を使った細工を偶然知り魅力的に感じ、完成度が高い(販売できる)ものが作れるようになったので、商品を一新して今は和風アクセサリーをwebなどで販売している。

[ものづくり全般に対する意識]

お菓子やアクセサリーなど売られているものを見て自分も作れるのではないかと思うことはあるが、買った方が安いと思うものも多いので、作ってみるかどうかは価格によるのかもしれない。本業で業者などに依頼するリーフレットや名刺などの製作は、パソコンを使って自分でもできてその方が安い、と思うことがある。衣服に関しては自分で作ることができるという気がしない。(マスコットや刺しゅうも縫製だがハードルは高くなかったのか?という質問に対して)平面、もしくは直線のものを作るができるが、立体は無理だと感じる。服は立体なので自分には無理だと思う。「服が工場の機械でポンとできる」という発想はなんとなく理解できる。だからファストファッションなどの服は安いのだろうとなんとなく想像している。

4. インタビュー対象者と学習指導要領^{3) 4)}

本報で取り上げたインタビュー対象者3名が中学生であった時の学習指導要領と照らし合わせて、考察を試みる。

インタビュー対象者①

1958年告示の学習指導要領が適用された年代である。科目名は「技術・家庭」となり、女子向き・男子向きと区別する記述がみられる。被服製作について洋裁・和裁を含み、1学年では「日常着の製作、被服の整理および簡単な編み物に関する基礎的技術を習得させ、衣生活を合理的に営む態度を養う」2学年では「休養着の製作および簡単なししゅうに関する基礎的技術を習得させ、生活を快適に営む態度を養う」3学年では「日常着の製作、被服整理および簡単な染色に関する基礎的技術を習得させ、衣生活を改善する態度を養う」ことが示されている。ただし、その前の改訂は1956年発行と直近であり、働き着・休養着・日常着などの記載に大きな違いはないが、製作物例を見ると洋裁・和裁ともに高い技術を必要とする内容となっている。短い期間で大きな改訂があったことから裁縫教育の過渡期であったとも考えられ、教育現場でも教員によって内容の差が大きかったのかもしれない。被服製作の題材例としてブラウス、スカート、ワンピース、パジャマ、ひとえ長着が挙げられている。

インタビュー対象者②

1969年告示の学習指導要領が適用された年代であ

る。科目名は「技術・家庭」であり、女子向き・男子向きと区別する記述がみられる。被服製作については、それまでの指導要領と同じく学年ごとに目標が設定されているが、和裁を含まなくなる。被服製作の題材例としてブラウス、スカート、ワンピース、パジャマが挙げられている。

インタビュー対象者③

1989年告示の学習指導要領が適用された年代である。それ以前の1977年の改訂では女子向き・男子向きという記述はなくなり、被服製作については、作業着・日常着・休養着の製作という記述がある。被服製作の題材例としてはスカート・スモック・パジャマが挙げられている。1989年の改訂では男女共修となり、被服全体の目標として「日常着及び簡単な手芸品の製作を通して、生活と被服との関係について理解させ、衣生活を快適にする能力を養う」との記述がある。ここでは具体的な題材例は挙げられていない。これは男女共修が段階的に進み、被服製作の題材を女性用衣服に限定できなくなったからと考えられる。

インタビュー対象者①の幼少期は既製服産業が飛躍的に発展する前の時期であり、減ったとは言え和服もまだ生活の中に存在した時代である。ただ、和服が一般的な日常着であったとまでは言えないので、実際の衣生活と学校での裁縫教育に多少の乖離が見られる。

インタビュー対象者②の幼少期にはすでに既製服産業が十分に発展しており、中学生の頃には衣服は作るものではなく購入するものとなっていた。⁵⁾ 和服はすでに日常着ではなくなっていたことと被服製作に和裁を含まなくなったことは一致しているが、洋裁に関しては、すでに家庭生活の中では子供服以外の洋裁はなかなか見られなくなっており、この3名の中では、実際の衣生活と学校での裁縫教育が一番かけ離れていると言える。

学習指導要領は、特に技術・家庭のそれは、時代による家庭生活の変化とニーズに合わせて変化していく部分もあると思われるが、実際の社会の変化を確実に見極めながら改訂されていくと考えられるので、時間差が生じるのは当然のことかもしれない。

インタビュー対象者③は、学習指導要領には被服製作の記載はあるが、実際には衣服と言えるものの製作実習は減っており、これは既製服が完全に定着した実際の衣生活の状況と一致している。またインタビュー

対象者③の「衣服に関しては自分で作ることができるという気がしない」という発言は、衣服製作を経験していないことに起因しているとも考えられ、裁縫教育との関連をうかがわせるものでもある。

5. おわりに

時代が進み、家庭での衣生活と学習指導要領が移り変わり、家庭からも学校教育からも「衣服は人の手で作られるもの」という認識が得られにくい状況になってきていることが、インタビュー結果を比較することによりわかってきた。ただ、年代の違いにかかわらず、家庭によっては幼少時代までは周囲の人々の手によって子供服が作られる環境がある場合も多く、周囲の人々の状況も聞き取る必要があるとわかった。今回取り上げた3名のインタビュー対象者には、インタビューを進めるうちに新しい事項について聞き取りの必要が生じた場合には再度調査を行える環境にあり、必要なインタビュー項目はこれまでに網羅・確認できたものとする。

今後は対象者の範囲を広げてインタビューを進め、生涯活動としてのハンドメイド活動と裁縫教育との関連性をさらに詳細に調査していきたい。

<参考文献>

- 1) 山本泉「裁縫教育とハンドメイド活動の関係 — 研究の背景と計画 —」樟蔭教職研究2, 97-100 (2018)
- 2) 名店手帖 vol. 14 「流しの洋裁人」
<http://art-and-more.jp/2015/02/oharikotraveler.html>
(閲覧日2018.9.29, 更新日2015.2.15)
- 3) 西之園君子、中村民恵「戦後における小・中・高等学校の家庭科教育の変遷 (第1報) — 学習指導要領における被服教育指導内容の改訂 —」鹿兒島純心女子短期大学研究紀要 第30号, 11-29 (2000)
- 4) 国立教育政策研究所HP学習指導要領データベース
<https://www.nier.go.jp/guideline/>
(閲覧日2018.9.29)
- 5) 日本衣料管理協会刊行委員会『アパレル設計論アパレル生産論』日本衣料管理協会 (2013)